



——— 中1・中2・三豊支部・環境経営委員会 合同例会 ———

『20年後の自分たちの地域を考えよう!』 ～「誰1人取り残さない社会」の実現に向けて～

【報告者】

(株)DOUBLET / 代表取締役
エラリー ジャンクリストフ氏
(高松第7支部)

(有)ヨシイ / 後継者
好井 館太氏
(中讃第1支部)

(株)アロパー / 取締役
関本 亜紀氏
(高松第7支部)

藤田鉄工(有) / 代表取締役
藤田 一仁氏
(三豊支部)

【コーディネーター】

環境省 四国環境パートナーシップオフィス
所長
常川 真由美氏

今回の合同例会について

今回の例会は、「20年後の自分たちの地域を考えよう!」というテーマで、持続可能な地域づくりに対して取り組みを行っている香川同友会の会員4名に体験報告を行っていただきました。

4名の報告は、それぞれ別々の取り組みであり、「地域」や「環境」といった共通のテーマはありませんが、取り組みの内容や期間などは全く別です。たくさんの取り組みを一度に聞くことはメリットも大きいですが、参加していただいた会員さんが混乱する可能性もありました。

そこで、環境省 四国EPOの常川所長にコメントーターとしてお越しいただき、報告者の取組みに対して補足をさせていただきました。

例会を設営するにあたって、「誰も取り残さない社会の実現を目指す」というSDGsの理念を意識することとしておりました。そのため、多くの会員さんに参加をしていただくために3つの支部との合同例会とし、会場もアネシス瀬戸大橋、セトウチキッチン、

Zoomというように3つの会場を用意するという挑戦を行いました。

例会を通じて学んでほしいことはたくさんありますが、最も大きなことは自分たちの地域を環境的にも経済的にもより良くしていくためには、より多くの人が取り組みに参加し、なおかつその活動を継続しないとイケないということです。

例会の企画を始めたときは「誰も取り残さない」とは、我々経営者がリーダーシップをとってみんなを巻き込んでいくだけのイメージでしたが、今は「誰も取り残さない」「みんなが活躍できる場を用意する」という認識です。

そのためには、今回のような合同例会だけではなく、地域や環境に関する例会が各支部で主体的に設営していけるようにならないといけないなと思います。

座長

(有)小林塗装店 代表取締役

小林 耕司 / 記

(中讃第3支部)

フランスと日本の環境に対する取り組みの違い

(株)DOUBLET／代表取締役 エラリー ジャンクリストフ氏 (高松第7支部)

矛盾を抱える 現代社会においては

それぞれの個人の活動に関しては、この社会においてはまず道がない、解決方法がないというのが正直なところだと思います。いくら、活動しても個人の活動に過ぎなくて、影響はそれほどないと思います。

まさにこの活動の限界は何なのかというと、今のこの石油中心の社会です。ガソリン等、石油関係のものは私たちの生活の中で毎日必ず消費される仕組みになっていて、そこから外れる、それを使わないようにするのは非常に難しいものがあります。その形態から離れて生活するにはまだまだ限界があります。

具体的にいうと、おそらく同友会に入会している企業でも分別できないところがたくさんあると思いますし、また私が分別したとしても、例えば隣の企業はそれができなかったと思います。そうするとどう処理していくのか、疑問に感じます。

個人の扱い方と企業の扱い方については、キーワードとして経済優先の話が出ますが、経済優先、利益は企業にコストがかかるからという理由があるだろうと思います。

そんなわけで、経営者として、あるいは企業家としてはそこに大きな壁を感じます。例えば、国は観光、インバウンドに力を入れていますが、当然インバウンドは飛行機を利用します。そういった経済活動に参加することによって、いくら自分が活動しても効果はないのではないかと感じてしまいます。

ですから、その矛盾をどうやって解決していくかが、まさに同友会の中で活動することによってみんなと意思疎通ができ、組織として動く。組織の中で活動する。意識の違いを認識し合う中で、実はこんなこともできるのではとか、あんなことの活動の中で組織として「よい経営環境をつくる」など、何ら



かの形で社会への働きかけは個人よりも団体で動くほうが絶対的に力が発揮できるはずだと思います。

こんな形で、私としては自分が感じている矛盾はどうにか解決していきたいと思っています。

個人の利益よりも社会の利益を優先するときに来たのではないか？

80年代にイギリスの当時のサッチャー首相が「社会というのは存在しません。個人しかいません」と発言しています。

いわゆる個人の利益が絶対優先だというわけです。個人の利益を最優先することによってまさに今日のような社会になってしまったわけです。個人の利益ではなく社会の利益を優先しなければならぬ時期がそろそろ来たのではないかと思います。

日本に来てよく言われるのが、フランスは個人主義でみんなが勝手にいろいろやっていて、私には見られていないように見えるのですが、私はフランス人は個人であって社会のために戦っていると思っています。フランス人には内と外の感覚はなく、個人と個人が構成員である社会

の二つしかありません。社会が危ないと個人が感じたら個人が動きます。例えば、デモをしたりストをしたりしますから、日本よりは先に進むことを考えているように思われます。

再び循環型社会を

日本は昔は循環型社会だったとか、それに誇りを持って今もいろんなことをやっている、と日本政府は言っています。実際のところ循環型社会は、ぶん前に終わっています。フランスのエコと同じように日本では循環型社会をアピールしているわけです。

実際に必要なことは、これから私たちはどのようにしていくかです。要するに循環型社会の実現です。それは、それぞれの個人やそれぞれの企業、各地域での取り組みになります。いざれにしても自分から発生したことに限っては、自分が全て責任を持って負担することが理想的な活動ではないかと思っています。

また、個人では難しくても、組織としてならできることがあるでしょうし、地方の自治体や国の単位で動けば必ず解決できると思っています。

エコアクション21とは？

(有)ヨシイ／後継者 好井 館太氏 (中讃第1支部)

自社の取り組みについて

私自身、エコアクションの名前は知っていましたが、内容についてはあまり知りませんでした。今回勉強して中小企業向けに簡素化し、取り組みやすくした、環境に優しい経営の取り組みについて審査認定する制度だということがわかりました。

イメージとして、エコアクション21は自然環境がどうか、資源を大切にと言われる今の世の中で、中小企業が外部から信頼を獲得して発展していくための一つの方法のよくな気がします。

自社の取り組みは、11年ほど前からです。取り引きのある保険会社の人から、当時の環境省がこれを推進しているのでエコアクション21を取得しないと官公庁からの車検整備の仕事が入ってこなくなるらしいと言われ、周辺の自動車整備業者10社余りが同時に取り組みを始めたのがきっかけです。

面倒臭そうにみえて至ってシンプル

エコアクション21は、年に一度審査員が当社を訪問し、実際の取り組みがきちんとして

われているかを審査する制度ですが、実際のところ、そのために事前に各点検項目をチェックしたり、数字を拾い上げたりと手間がかかる上に、審査・認定にある程度費用もかかります。

その割に当初言われていた官公庁からの整備もゼロではありませんが、取得したからといって増えたわけでもありません。そんなわけで、同時にエコアクション21を始めた同業者はみんな辞めてしまい、残ったのは我が社だけです。

こう言うと、なんや結構面倒臭そうやし……と思われるかもしれませんが、やっていることは至ってシンプルです。例えば、朝出社すると皆で社内や会社周辺の道路を清

掃し、こまめにショールームの電気を消したり、照明をLEDに変えたり、給油に来たお客さんにタイヤの空気圧チェックや定期点検を呼びかけたり等々です。

エコアクション21の取り組みを続けるわけ

ではなぜ我が社が手間も費用もかかる上にそれほど売上がアップにつながらないようなこの制度を続けているかというと、エコアクション21を継続することで三つの機会に恵まれるからです。

一つ目は、年に1回社内を綺麗にする機会です。審査員が年に1度は来社するので点検項目の工場の棚や油水分離層などは、どんなに意識して使っているても汚れは少しずつ溜まっていくので、年一回の大掃除というわけです。

二つ目は、社員教育の機会です。二酸化炭素排出量や水使用量の削減など環境について決めた目標に対してどう乗り越えていくか対策を考える必要があるのです。自分たちが決めた目標に対してどうやれば達成できるか社員同士で考え、行動するので一致団結の機会にもなります。

三つ目は、法令遵守の機会です。普段気づきにくいものでも守らなければならぬ法令がたくさんあります。毎年少しずつ変わっていく法令について審査員から指摘してもらえる機会になります。

まとめ

「環境」という言葉を地球規模の自然環境とか大きな意味での環境ではなく、会社とその周辺の環境というふうに考え直したとき、我が社には従業員もいて、困ったときに我が社を頼ってきてくれるお客さんがいる。そんな人たちが自分子どもや家族が生活する環境を10年、20年後もキープしていくために、エコアクション21への取り組みはもちろん大切なことだとは思っています。

しかし、それに限らず些細なことでもいいので環境のためになることに取り組んでいただけたらと思います。その積み重ねが20年後の我々の次の世代に響いてくると思います。



アロバーのSDGsの取り組み

(株)アロバー／取締役 関本 亜紀氏 (高松第7支部)

貧困をなくそう

創業当初、コーヒー豆は商社を通じて仕入れていました。が、現在の社長になってからは現地に買い付けに行くようになり、今年で14年目になります。

買い付け先の国は中米のニカラグア、エルサルバドルで、必ず毎年買い付けに行っていますが、中でもニカラグアはとも貧しい国です。今から10年ほど前に買い付けに同行させてもらったのですが、町中ではお金をねだっている子どもたちの姿をあちこちで見かけました。

我が社ではダイレクトトレードというコーヒーの取引を行っています。この仕組みは間に商社を入れずに直接買い入れをすることですが、コーヒー豆の味や品質に見合った対価での取引です。商社を通さず農家さんに直接お金が入るので毎年栽培に専念することができ、そこで働く人たちの収入も安定しています。

もう一つ大事にしていることがあります。それは継続取引です。例えば、今年も買った農家さんは買わないと、農家さんは安心してコー

ヒー豆の栽培に取り組みません。ですから、必ず毎年、同じ農家さんから買うことを大切にしていきます。

質の高い教育をみんなに

ストリートチルドレンを町中で見かけたとき、私は教育の必要性を強く感じました。

10年前に見かけた子どもたちの姿が忘れられず、数年前に社長に「ニカラグアに何か恩返しができるませんか」と相談したことがあります。そのとき社長は「よしつ、やろう」と即答してくれました。

その結果、中讃第2支部の(株)レベックの松田さんにお願いで、ニカラグアに学校を建てることを記したわが社の経営理念、指針書をスペイン語に訳してもらい、それを現地の人たちに見てもらい、とても喜んでくれました。

働きがいも経済成長も

我が社のスタッフは8割以上が女性、それも主婦です。しばらく職場から離れていた人や子育て中のスタッフもいます。我が社が子育てをしながら社会復帰をしていく場になればと思っています。

2つの店舗の店長は2人と



も子育て中の主婦で、もともとはパートタイムで入社したのですが、正社員になりました。店長です。彼女たちは本当に仕事熱心で、自分の幸せと同じぐらいアロバーのことを考えてくれるとても大切な仲間になりました。

2019年に「子育て行動計画策定企業」の認証を受け、同じ年に「素敵に高松女性活躍企業」に認定されました。

人や国の不平等をなくそう

ダイレクトトレードを続けて14年になります。その間、相場に関係なく品質に見合った取引をやってきました。今年1月に訪問したときは、10

年前と比較していろんな環境が少しずつですが変わっていました。

もちろん、アロバーだけの力ではなく、同じ志を持ったコーヒー業者さんたちが同様の取り組みを続けてきた結果だろうと受けとめています。

まとめ

スマイルトライアングルの理念に向かって事業を進めていく中で、自然にSDGsの目標に取り組みていることに気がきました。取り引き先にはダイレクトトレードや継続取引の取り組みによる笑顔をお客さまには安心・安全で品質の高いコーヒーを安定的に仕入れてお届けすることができるとして、アロバーにとって人間の成長できる場としての笑顔。これらの全てがSDGsにつながっていることを感じています。

今回のテーマの20年後の地域ですが、アロバーは働きがいのある職場環境をさらに進めて、働くお母さんを応援しながら成長しており、ニカラグアの地域も良くなっています。私の頭の中にはそんな映像が浮かんでいます。

父母ヶ浜の「父母の会」代表として

藤田鉄工(有)／代表取締役 藤田 一仁氏 (三豊支部)

「父母の会」とは

今回の私の発表は「父母の会」についてですが、この会は父母ヶ浜の白い砂浜を守り、それを後世に残そうという運動と、稚魚の育つ漁場を守ろうという目的で平成8年に7名の会員で発足し、現在会員は100名を超えています。私が参加したのは10年ほど前からですが、現在代表を務めさせてもらっています。

主な活動は、毎月第1日曜日とゴールデンウィークと正月前の清掃活動です。その他に子どもたちとの自然観察会があります。

「父母の会」は、清掃活動が主の団体なので会則はありませんが、それが却って長続きの秘訣のようで、積極的に自主的に参加してくれている人たちと一緒に活動を続けています。

ゴミ問題や観光化が課題

今後の取り組みと課題ですが、今後の活動の継続が課題として上げられます。若い人、とくに小中学生に向けて一緒にやりませんかという形で募集をしています。それを今後も続けていきたいと考えています。

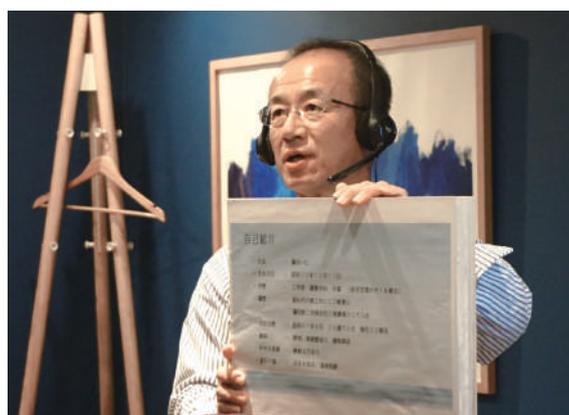
お父さんやお母さんと一緒に参加してくれている子どもたちがいますが、そんな子どもたちが砂浜に興味を持ち、楽しみを見つけてくれたら、成長しても活動を続けてくれるような気がしています。

ゴミ問題、とくに世界中で問題になっているマイクロプラスチックに関して、「父母の会」の活動の中で、テレビや新聞等のメディアと協力しながら取り組みを進めていきたいと考えています。

父母ヶ浜の観光化については、懸念を抱いているお年寄りもいますが、町や協議会等の中で、全体計画について皆さんと話し合いができればと考えています。今のところは難しい状況にあるので、これからの課題として町の方向付けを皆さんと一緒に話し合っていく場を持てればと思っています。

これからのまちづくりとあるべき姿

10年後、20年後のあるべき姿ですが、いま現在、人口減少や空家問題が仁尾町や三豊市で問題になっていますが、若い人たちにはぜひ故郷に戻ってほしいと願っています。



以前、大分県の湯布院の若い人たちが、ドイツに研修に行き、100年先のまちづくりに取り組んでいる姿に感銘を受け、自分たちも同じように100年先のまちづくりを考え、そのためにコツコツと一歩ずつ取り組みを進めることしか生き残りの道はないと決断したからこそ、今の湯布院の町があるわけです。

このようにまちづくりは、皆の思いの結晶とも言えるものなので、じつくりと末永く考えていく必要があると捉えています。

これからのあるべき姿として、地域に住んでいる人が地元を誇りが持てるまちづくり

をと考えます。仁尾町出身者が故郷の町を自慢できるようになまちづくりをしていきたいと考えます。

私が大切にしている言葉の中に、「文化と文明の違い」があります。文明は、どんどん大きく広がっていき、それ息詰まる場面があったりしますが、文化は積み重ねるほど深いものになっていきます。

「父母の会」も美しい町を見据えて、一つずつゴミを拾うことを積み重ねていき、美しい町並み、美しい浜をつくれれば、やがて仁尾町や三豊市の発展に寄与できるのではないかと考えます。

地域の可能性をいかに発掘し、育てていくかのヒントは我々自身の中に眠っていると思います。ひとりではなく皆で知恵を出し合い、力を合わせれば可能性はあると思います。

「父母の会」がそんな波のうねりの一つになればと願っています。これからも活動を続けていきたいと思っています。